



Title	2009年高要市金利鎮調査記録：「村の土地」の実在をめぐって
Author(s)	片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニュースレター. 2009, 4, p. 155-175
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2009年高要市金利鎮調査記録： 「村の土地」の実在をめぐって

片山 剛

本科研は、1930年代の広東省で作成された「田畠調査冊」を資料として、その整理・分析と応用を課題としている。2007年11月のワークショップにおいて、高要県第八区白藤岡郷が1934年に作成した田畠調査冊と関連資料の『高要県政公報』とを利用して、当該田畠調査冊の読み方を探った結果、白藤岡郷とその近隣集落との間の土地をめぐる問題（「村の土地」が存在するか否か）の解明が不可欠なことに気づいた¹。ただし『高要県政公報』所収資料のなかに、上記問題を解析するうえで重要ではあるが、地方特有のタームのため意味のわからないものがいくつか残った。「壘ラン埗」「寄庄穀」「涌源」がそれである。

上記タームの意味を現地の古者に尋ね、かつ景観観察を行う目的で、旧白藤岡郷とその近隣集落が位置する金東圏地区を調査するべく、2009年1月に短期間ながら、広東省肇慶市高要市金利鎮を訪問した（図1、図2）。その結果、旧中国農村社会における集落と土地・水面との関係を考えるうえで注目すべき採訪結果を得ることができた。

そのキーワードは、「村」「壘 or 壘埗」「寄庄谷（寄庄穀）」「涌源」「鴨埗、鵝埗」「田」である。これらタームについての本格的考察は別稿で行い、本稿ではその要点を“速報”として紹介することにしたい。

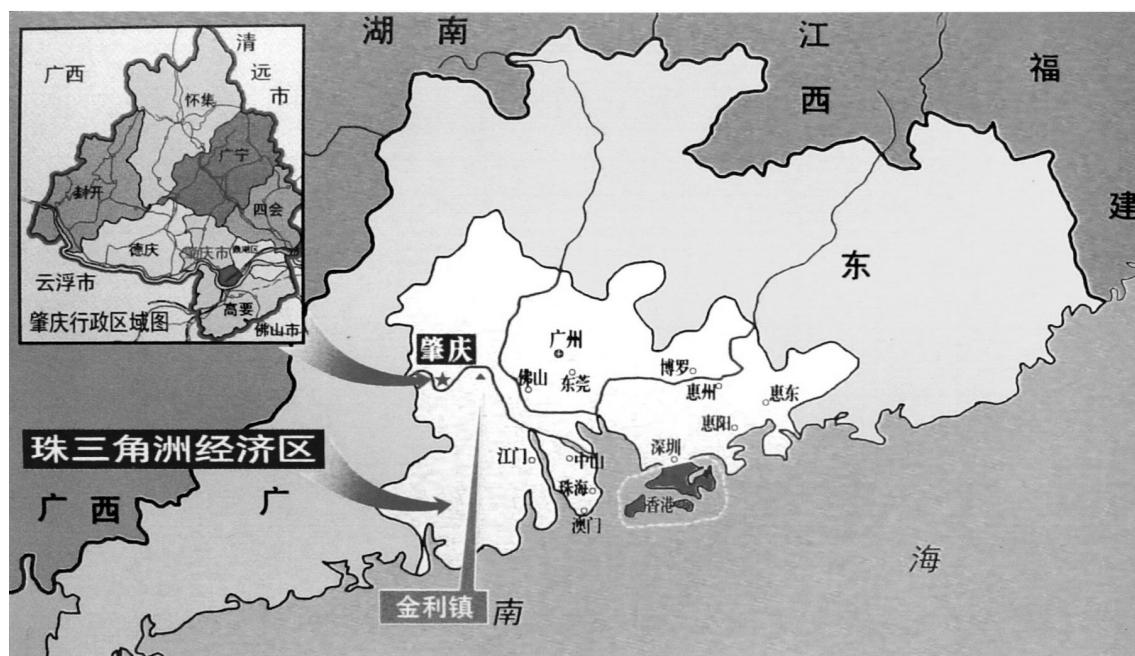


図1 金利鎮の位置

¹ 片山剛「1930年代広東省土地調査事業と郷の境界画定：「村の土地」の存否をめぐって」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』2, 2008年, pp.31-50.

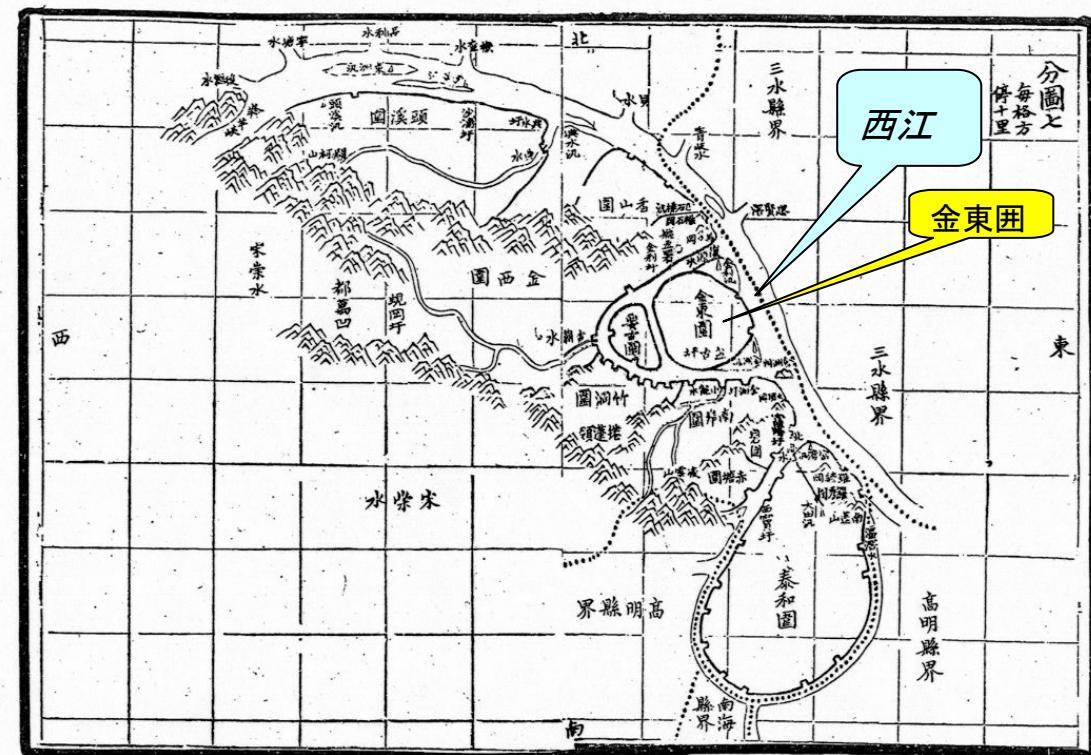


図2 金東園の位置

さて、金東囲において、農家による農作業が行われる場である一筆々々の水田は、この地域の「過剰な水」（西江などの外水と山地から流れ出る内水）から二重に守られている。すなわち第一は、金東囲の堤防である（図2）。第二は、金東囲内部の「涌源」（クリーク）の水が流れ込んで淹没しないように、水田とクリークとの間に築かれた「涌頭」（小堤防）である。この「涌頭」によって守られた区画は、金東囲では「壠ランないし壠ラン埗ブ」と呼ばれている（図3）。したがって、末端の一筆々々の水田に至る地理空間の重層的区画として、さしあたり次のように整理できる。

<①金東園—②壘ラン—③各筆の水田>

さて、各筆耕地には、所有者としての業主が存在している。この業主は当該耕地を自ら經營耕作する場合もあるし、あるいは租佃（小作）に outs 場合もある。そして売買・相続によって、各筆耕地の業主が変わったり、均分相続で一筆の耕地が細分されたりする。今回の調査でも、解放前の金東囲において、各筆耕地が売買と相続の対象となっており、他の「村」の農民に売却されていたことが確認された。

ところで、地理空間の重層的区画において、各筆耕地と金東囲との間に位置する壠については、これまでの研究ではほとんど照明が当てられることがなかった。しかし今回、きわめて興味深い話を聞くことができた。それは、同じく陸地であるが、壠は各筆の水田とは次元が異なる単位であり、異なる性格をもつ、という点である。上述のように、水田の業主（所有者）は売買・相続によって変動し、また一筆の水田は細分化されることもある。

しかし、壇は売買の対象にならず（「不能売」）、ある特定の「村」に固定的に帰属している。そして、壇 a が村 A に帰属している場合、村 A の村民が壇 a に所在する水田を村 B の村民に売却する（所有権の移動）と、村 B の村民は村 A に対して「寄庄穀」を払う必要が生じる。寄庄穀は村 A 以外の者が所有者となった時に納入義務が生じるもので、村 A の者が所有者である時には納入する必要がない。すなわち、壇 a に所在する水田に対する関係は、村 A の者であるか否かによって異なる（ある意味、村 A 以外の者に対して排他的といえよう）。

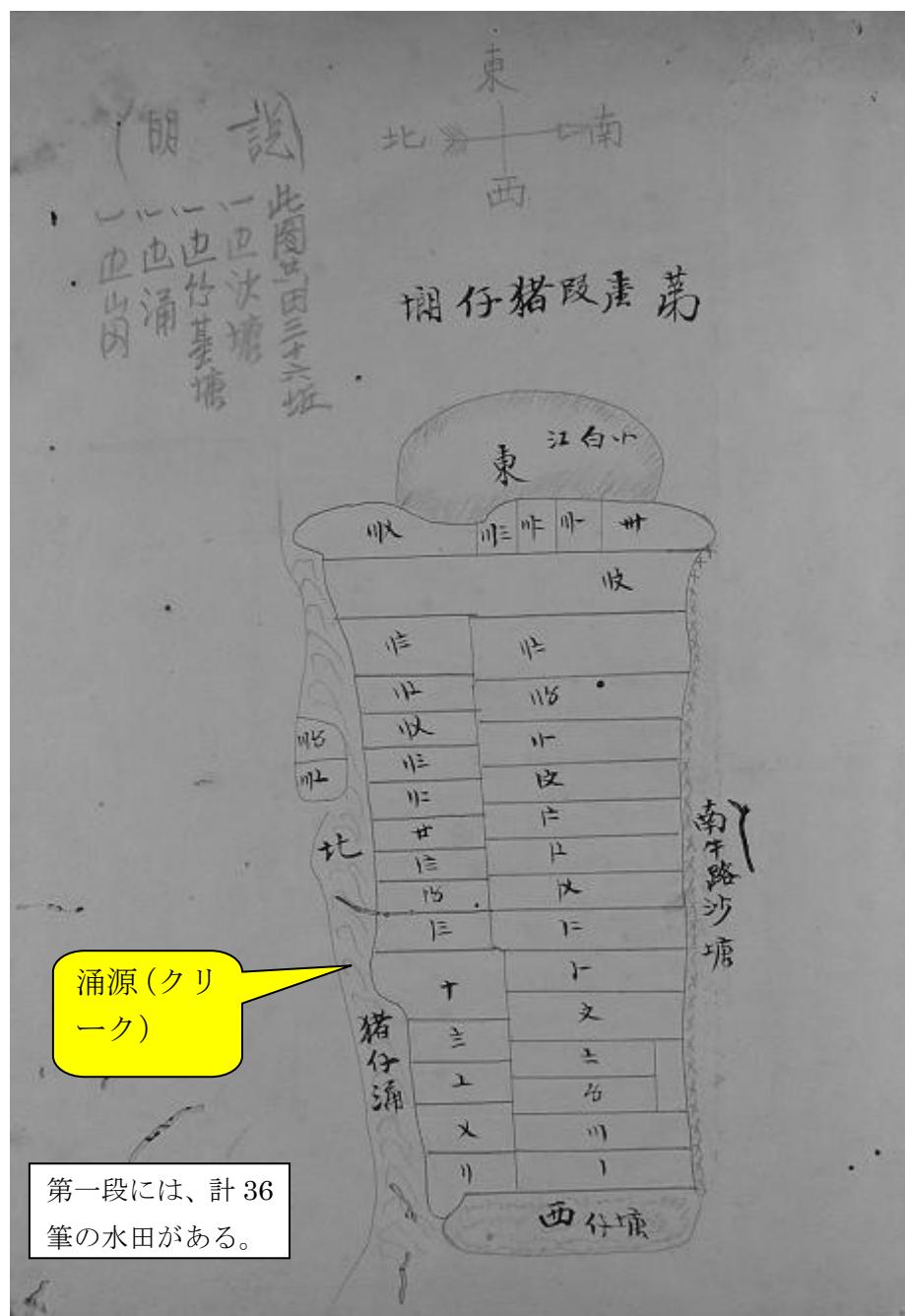


図3 1934年、白藤岡郷作成の田畠調査冊 第一段 猪仔塙

また、涌源（クリーク）についても境界線が設けられており、一定範囲の涌源が特定の村に帰属している。そして、その範囲で「打魚」する権利（秋から冬の時期に限定されるが）は、その特定の村が保有している。さらに、涌源が村に帰属していることと関係して興味深いのは、「私人」にはアヒルやガチョウを飼育する権利がなく、村がその権利をもっている点である。すなわち、アヒルやガチョウを飼育するには、飼育場として涌源が必要であるが、涌源は村に帰属しているので、村のみが飼育する権利をもっている。そして村は、上に述べてきた諸権利を入札によって「私人」（当該権利をもつ村の者である必要は必ずしもないようだ）に与え、得た入札金を村の収入とし、村の用に支出する。このように、売買できる財と売買できない財があり、売買できない財の典型が村の財なのである。

以上、金東囲では、第一に、壘という単位の土地区画は個人や個別世帯、さらには宗族組織でもなく、村に固定的に帰属すること；第二に、涌源という水面も同じく村に固定的に帰属すること；第三に、涌源の一部（と陸地）が鴨埗・鵝埗（アヒル・ガチョウの飼育小屋と飼育場）に充てられ、これも村に帰属すること；そして、鴨埗・鵝埗として存在するのは村が開設したものだけであり、「私人」のそれは存在しないこと；等が明らかになった。そして、村の収入として、①寄庄穀の入札金；②涌源の入札金；③鴨埗・鵝埗の入札金；等が存在することが判明した。村にこれらの収入があることから、かかる財を有する村を「団体としての村」として性格づけることも可能かと思われる。

今回の調査において、金東囲の土地と水面の双方をめぐる具体像がはっきりしてきたのは、8日午後に三甲村の古者が「田」と「壘」の違いに言及し、さらに「寄庄穀」の話をされてからである。6日の金江村委での採訪では、後述するように金江村が「権利をもたない村」であるため、また7日の金一村委での採訪では、経営耕作の経験を解放前から長くもつ古者を採訪する時間が短かったため、「村」と水面との関係については、手がかりを得られたが、「村」と土地との関係については、五里霧中の状態が続いていた。そのため、古者への質問も要領を得ていないことが多かった。以下に紹介するのは、筆者の広東省農村調査に長年に協力していただいている陳忠烈氏（広東省社会科学院研究員、広東省政治協商会議常務委員）の速記ノートである。そのため、その中国語は必ずしも完備したものではない。しかし、その内容は“速報”として学界に紹介する価値があると判断し、ここに掲載する。なお、文中の（ ）は陳氏の原文、〔 〕【 】はそれぞれ片山による補足と注釈である。

1. 1月6日（火）金江村民委員会（図4）

金江村は、1930年代の名称は白藤岡、あるいは騰岡、騰江であった（江と岡は広東語では同音）。集落の「開村」は明代といわれており、元代の金東囲建設には参加していない。後掲の聞き取りから判明するように、集落は謝姓が住む「東辺」と鄧・朱・李・陸の4姓が住む「西辺」とに分かれる。これに対応して、社稷神も東辺に一個（村民委員会の建物のすぐ裏）、西辺（集落の西端の廟の近く）に一個ある。

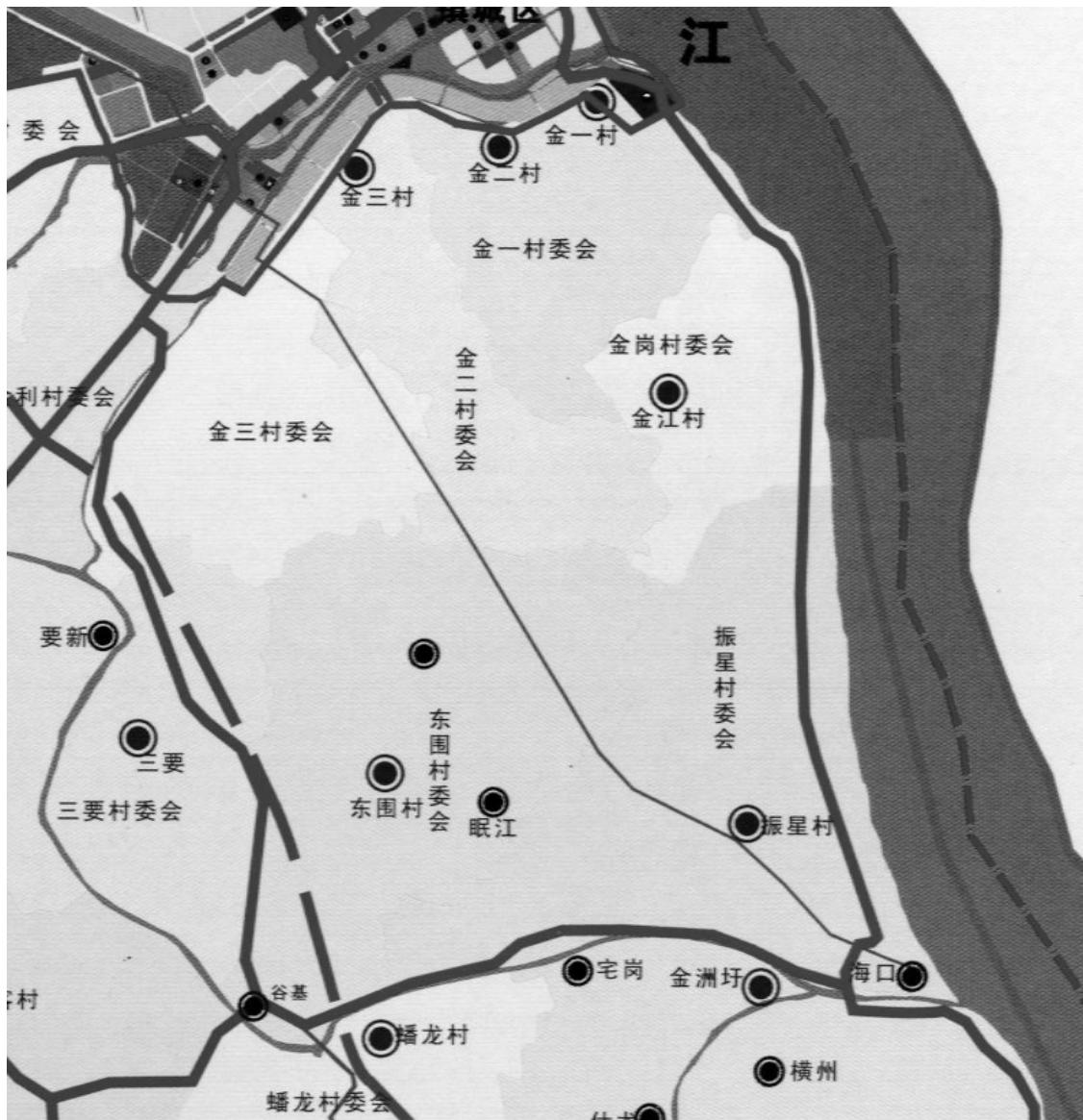


図4 現在の金東囲における集落分布（原図は着色の相違で各村委の領域を図示しているが、本図ではモノクロのため判読できない）

(1) 午前 金江村委で採訪

Ego01 謝宝源：71歳。1937年生在白藤岡（金江村）東邊（本村分東、西邊）。東邊全姓謝。8歲在謝氏祠堂開始读书，读了四年书。12歲开始耕田。白藤岡开村三百余年。我是21传人。太公是从肇庆鼎湖水坑村来此地看鸭寮的，住下来生了四个儿子。【1949年ごろ、すなわち土地改革前に耕作を開始。】

Ego02 邓五九：69歳。1939年出生在本村西邊。在謝家祠堂读书。1949年开始读书，读三年书（那时是新学。謝家祠堂合作化后改为金江小学。十多年前小学退出，回复为祠堂）。此后一直在村耕田。我耕田时还没有合作化。我记得13岁那年开始同大哥一起耕田（那时已土改了。土改成份是上中农）。【土地改革後、合作化前の耕作開始であり、土地改革前

の耕作経験はない。】

Ego03 謝濟：76歳。1934年出生在本村東邊。7歳在謝家祠讀一年舊書，三年新學。然後到金利中心小學（舊時的三甲金溪社學）讀二年新學。1953年回鄉土改耕田。父親名添樂，在本村開茶樓，也叫“添樂”。【土地改革前の耕作経験はない。】

Ego04 邓秩祥：72歳。1935年出生在本村西邊。7歳在西邊鄧家祠讀一年書塾。然後轉去謝家祠讀四年新書。14歳開始耕田。土改時的成份是富農。【土地改革前の耕作経験若干あり。】

○廣東省的土改：土改 1952 年开始，1953 年结束。

○现在的全村人口是 1132 人。全村姓氏：谢 500 多人，邓 300 多人。全西边各姓合起来共 500 多人。除邓姓之外，还有朱、李、陆，西边共四姓。

○开村：首先开村是西边邓姓，看见环境不好，又迁到北门（现在金利镇大塱，今有大塱车站，在西围），后来谢氏在东边发展起来，人口渐多，邓氏又重新迁回西边。

謝宝源说：全东围有三水田（三水人所有的田）一千多亩。我耕东围 4 亩多。（其中）三水田【三水県人が所有する水田】1 亩多。我、父、母三人耕。土改成份贫农（祖先遗下四斗田，约 1.4 亩，在东围。其余的 2 亩多是租来的）。东围田分开五六块。祖传田分开二块。大的一块差不多 1 亩，土名大肚塱【1934 年の田畠調査冊所載絵図の第 30 段】。从家到大肚塱约 20 分钟。另一块在玉官湖【同、どの段か不明】。

○租来的田：一块在大塱【同、第 23 段】。一块在深涌尻（“尻”的粵音“督”，尾部的意思）【同、第 14 段】。大塱田是要古主人（要古是现在的金利镇三要村委会）。是姓陆或姓梁的宗族太公田，抗战前偶然有人来收过租，我们随便给些谷子就行了，没有规定租谷多少，抗战以后他们一直没有来收租。这个地方三年只有二造收成，经常水浸，这里是种挣稿的。

○围料：是三甲的东围围董会来收。白藤岗没有人做过围董。一甲黄姓、墨江的“话事人”等多做围董。因为这里经常水浸，要交“围料”的年份也少。“围料”是耕作者？负责交。

(2) 午後 金江村委で採訪

Ego05 謝振洪：1936年生在本村東邊。8歳在謝家祠讀四年書（一年舊學、三年新學）。在金溪社學讀一年新學。13歳回鄉耕田。土改前參加農會。成份是貧農。祖傳田 3.8 亩，父、母、我、弟四人耕。不够糧吃，要打魚捕蝦。田分開 5 塊。【謝振洪氏については写真撮影を失念した】

1. 塁尾：同均舉壠隔開一條涌，在均舉壠小涌的南邊。
2. 均舉壠【同、第 37 段】
3. 東藕塘【同、第 33 段】：地勢很低，經常水浸，上世紀 90 年代改為魚塘了。
4. 細壠【同、第 21 段】
5. 涌（昌）中湖壠【同、第 13 段】：這塊田最大，面積記不得。以上的田全部自己祖上傳下的。

（傍邊謝寶源插話：我們沒有自己的田。因為原租出的田主長期不來收租，也沒有人來追究，後來就成了自己的田，再傳給自己的后代，才成了祖上传下的田。但謝振洪反對

这样说法。他说：这就是自己的祖传田。)

最好的地块是均举塑。那里地势较高，浸得少，土质也较好。

谢振洪确认“祖传”田其实是谢宝源所说的情况。白藤岗同一甲田在蛟江嘴塑【第43段】相连，一甲赵姓有40多亩田在那里，主要是我村西边四姓人租耕多。一甲来收租的人不是地主本人，而是村中派出的代表，租谷收来“公用”。我知道一部分是用来“养老更”（村中的保卫人员）。【寄庄谷？】

○均举湖同二甲相接的土名：相接二甲的田，土名是西藕塘（第35段）。均举塑同西藕塘之间是两村分界。

问：这里的田不是你们的，为什么把它作为分界？

回答：因为我们历史上一直是耕这边里的，传统上作为分界。二甲来得早些，占地多。土地是“公家”的，只能出租，不能卖【塑は二甲に帰属しており、ここにいう租とは寄庄谷のことを指すか？】。我们来得迟些，占不到多少田，多数是租田耕，我们如果要租二甲田，也可以。

谢宝源说：土改时有一些塑田划到四甲，因为四甲田太少。【土地改革の時に金江村から四甲に土地を割譲したことについては後述参照】

○“塑埗”：这里作用一个塑的总名称使用，指所有的塑。例如，人们见面时问：“你是哪个塑埗的？”，对方回答：“我是某某塑的。”

○“寄庄谷”和“涌源”：

谢济回答：听说过“寄庄谷”，但不知道是什么意思。我是听早辈人讲过的。“涌源”就是“涌”的意思。

○关于窦：以前有两个窦。淳宣窦，王宣窦。后来关闭淳宣窦（1955年关闭），排水主要从金东电排站。王宣窦改成电动闸。王宣窦主要是白藤岗人管的，一甲人也管过的。淳宣窦属振星（振星旧名淳宣）管。窦的开闭由管窦人决定。窦是门式结构，一个人可操作开闭。

○清平均：在眠岗对面的基围下有一间平房，有匾写“清平均”，白藤岗属清平均。我知道金江、墨江、振星等都属清平均。上六甲是在金溪社学。

○清平均也管围董会，大水时要召集开会，布置防洪，保长等“话事人”也在那里议事，例如解决村间纠纷。

○金利六围：东围、西围、香山围、等等。东围有一个围董会。

○下四甲：墨江、眠岗、塑心（是墨岗谭姓迁入开村的）、淳宣（振星）、竹洲、茅洲、渤海、等等。上六甲、下四甲有参加拍东围。

○白藤岗迟开村，不入甲。白藤岗没有“基份”。如果有“基份”，有利用基坦利益的权利（有旱地可种花生、甘蔗等旱作物，可取泥烧青砖。例如十甲砖厂。基坦归村，给个人投标经营）。基坦又叫“海坦”，即基围靠江的那面。上游有淤泥冲下来，“海坦”会逐渐升高，可以利用。十甲砖厂是建在十甲的“基份”上的。本村的“基份”只有本村人才能投标，所以白藤村人不能利用基坦。东庆也没有“基份”。可能晚开村。“基份”归村，不归个人。东庆以下（以南）的“基份”全属淳宣。淳宣以上（以北）的“基份”属一甲。以淳宣基份为多。

- 东庆原称“东营”，曾经是驻军的。周围还有好几个“营”驻军的。但是我们已经没有见过军队。
- 清平约办公地方是清平社学（已毁）。
- 解放前基面只有 1 米多宽，高度 6 米左右，很陡，很单薄。我们没有见过东围崩基。1949 年崩基，东围没有崩。

2. 1月7日（水）金一村民委員会

金一村民委員会は、一甲村と二甲村の 2 つの自然村から成る。民国期には、2 村とも金溪鄉に所属する行政村であり、また、どちらも元代の金東圍建設に参加した村といわれている。

(1) 午前 金一村委会議室で採訪

黃焯均副主任（分管农业）：1951 年出生在二甲。改革前有 2000 多亩水田，现在有 1800 多亩水田。近镇区的农田开发为五金厂 170 多家。现在田地多种剑花、韭黄（有 300 亩左右，出口港澳）。

Ego11 黄锐：83 岁。1926 年出生在一甲。9 岁在本村祠堂读四年书塾（每年交祠堂一担谷）。11 岁丧母，同父亲耕田。16 岁以后帮耕（短工。帮人耕田）。帮耕之前同父亲投标祠堂田 10 多斗（大约 6 亩。1 亩相当于 2.4 斗），种大谷（红米）。一年一造。亩产 110—120 斤谷。经常饥荒。投标租率大约占产量的二分之一。（16 岁时饥荒）父亲去广州卖柴。开始帮耕。（1945 年父亲去世）。帮耕至 26 岁。多在本村做短工。其间有一年去眠岗大姐处帮耕。16 岁结婚。夫人在乡耕田。在本村投太公田五六斗（约 2 亩多）。土改成份贫农。土改后当民兵。1952 年未开始土改。1953 年结束。那时称“乡”（这里叫金利乡）。1952 年回乡参加土改、耕田。【11~16 歲に父について農業をしたが、16 歳から 26 歳時の土地改革までは短工であり、農業経営の方面にはついておらず、経営耕作の方面の経験は少ないといえよう。】

Ego12 赵盛基：75 岁。1934 年出生于一甲。11 岁在一甲祠堂读一年书塾（一担谷一年）。后转金溪社学读 3 年书。16 岁同母亲耕田（父亲一直在广州打工。上有一大姐，下有一小弟）。自己没有田，投太公田二亩（有时一亩多）。是母亲去祠堂投标。本村年年开投，不是每年都能投得到。另外，母亲做短工帮补家计。土改成份是贫农，分三亩田。【土地改革前の經營耕作の経験年数が短い。】

Ego13 黄照南：老书记。72 岁。1937 年出生在一甲。1947 年开始读书。先在本村祠堂读二年旧书，后在二甲书塾和金溪社学总共学了一年多。解放后在白土（？）读中学，后在肇庆师范进修一年。1959 年回乡当大队文书。1974 年当书记，到 1998 年退休。【土地改革前の經營耕作の経験まったくなし。】

Ego14 陆雪桂：71 岁。1938 年出生在二甲。13 岁在四甲祠堂读一年新书，后回二甲祠堂读二年新学。在高级社看牛（十多只），后当生产队长，在金利煤矿当工人至 1960 年。以后

回乡耕田，当干部。【土地改革前、成人前の経営耕作の経験なし。生産隊長として物知り】

黄锐：父亲去世后，我去投标。父亲在时，由父亲交租，父亲去世后有时我去交，有时妻子去交。单造田交一次，双造田交二次（双造田的地势稍高一点）。去祠堂交租，由祠堂总理收。一造田后，去打鱼、打工。以前围内涌很多鱼，多数在涌打鱼。有时去西江打鱼。一造收后，大多数都淹没，分不出涌。全东围的三分之二是大水面，不分彼此，打鱼无限制。如果水退以后，河涌显出来，各村捕鱼不过界。如果越界会打架。所以白藤岗、东庆人不敢过来。河涌的界属是跟随田地的。田归那村，那段河涌就归那村。

问：一甲村同什么村有“界线”？

回答：金江、二甲、东庆、星西（七甲）。二甲同一甲、金江、三甲、四甲、西村、星西（七甲）有“界线”。

○鸭埗：一甲有鸭埗。用投标。鸭埗是固定的，一甲的鸭埗在塘头，这是“村”的。“村”为鸭埗搭了棚盖。后来改为砖瓦鸭寮。这个鸭埗在上白水塱的塘头（现有遗址）。每年投一次，在黄氏大宗祠开投。

黄焯均副主任：二甲的鸭埗在东白塱的鸭屎墩。是“村”用竹木搭建的鸭寮。是养鸭专业的人来投标。本村人也可以投。在祠堂开投，祠堂总理收。

陆雪桂：二甲鸭埗在陆姓祠堂开投。二甲有姓陆、黄、孔、李、姚、唐、伦、苏。因为陆氏大宗祠在全村中心，所以在陆氏祠开投。这个鸭埗是“全村”的，不只是陆氏的。收入归“全村”所有，由本甲甲长收（陆雪桂按：当时甲长也是陆氏祠堂的总理。甲长有时是黄姓的总理，或其它姓的总理。）一般是本村田地多、资本厚的人投得。

○一、二甲鸭埗生产量大致相同，每年放鸭在一千只以上。投鸭埗收银，但记不得数字。因为每年都不一样。

○一甲姓：黄、龙、赵、李。解放后有林姓。鸭埗收入归黄，一甲田多数是黄姓的。解放前一甲黄姓占全村人口的70%。

问：二甲鸭埗的收入用什么？

陆雪桂回答：全村赛龙舟用，修道路。我村的鸭埗几乎每年都是姓黄的大耕家投得。“基份”坦的收入也归“村”。

问：一甲的鸭埗收入的用途？

黄锐回答：黄姓“太公”用，道路、拜山、修渠道等。

陆雪桂说：我小时候看到“坦”（靠近西江的基地）大多数已经归了“私人”。可能是“买断”了，或霸占了。围基原属“村”，基份坦应该原属“公家”（指“村”），什么时候什么原因归了“私人”，我不知道。

○另外的“村”收入：每年收获以后，“村”属的河涌开投，把水去干取鱼。投标的收入归“村”，不归祠堂。这项（叫“涌源”。后述）收入比鸭埗多，估计比鸭埗收入多三分之二。鸭埗收入：涌源收入=1:1.6。

○一甲的情况也一样。但二甲的河涌比一甲很多。二甲河涌收入也比一甲多。一甲河涌收入也归一甲黄姓大祠堂【？】。

问：一甲黄氏何时开村？

黄锐回答：不知何时。但知道我是 24 传。听说太公从珠玑巷来。姓龙人很少，来得迟。姓龙、李等杂姓是从兵营中流落下来的。估计一、二百年间。这里周围水边有几个兵营，但不知他们是几传了。

黄焯均副主任说：我二甲黄超过 500 年。

陆雪桂说：我们是三百多年前从三水的金本迁来，要回三水拜太公。听说姓唐是从金利江边村（西周）来的。二甲的基围归“村”，没有分开是哪个姓参与的，我们不知姓陆何时参与或有没有参与。二甲的人口，黄姓最多，其次是陆、孔。解放初全村 800 人。黄 300 人，陆 200 人，孔 160—170 人之间。其它姓只有几十人。到初级社人口才有 900 人。

赵盛基说：解放初，一甲赵 130 人左右。太公从新会来，先迁四会县，后从四会迁入一甲。不知何时迁入。估计迁入一甲至今 400 年左右。有大祠堂。

(2) 午後 1 恒大酒店で採訪

问：听过了没有“寄庄谷”？

答：没有听过“寄庄谷”。

问：解放前一甲有无“基份”？

黄锐回答：一甲有“基份”，白藤岗没有“基份”。一甲负责的围段从西码头到二岗。大约 2km 左右。二甲的围段接着一甲，从二岗到东庆（东庆无“基份”）。西码头（金利海口）、二岗（鹿洲岗）之东。

更正：西码头属西围。解放前无联围的围基，西江水是环绕东围的。一甲从龙头庙（在于一甲村头，现在也存在。）到二岗。二甲负责的围段从二岗到东庆。

维修：冬天维修集中一齐干。各村管各段。由围董会同一安排，由围董在船上巡视。多数是用泥、草包。白藤岗、东庆有田的也要来。各段在各自基下的田里挖泥，无论是谁的田都可挖，没有补偿给田的人。一甲无田的人也要上基，因为他们有房产要保护。平时巡视是由各甲负责所管的本段，但冬修、有汛期险情时，由围董同一调配人力，不分所属，均要上堤，不论哪一甲人要听从围董调动到险段。冬修工人有“工米”（发米作工资），由围董发放。冬修时，围董按每村总人口，按比例分配土方量。

围董会收“围料”，按田计。

黄锐说：我没有交“围料”的经验，可能是祠堂给付了【？】。“基份”坦用来种花生、蔗、香薯等旱作物。是投标的，一般不许别村的人来投。因为这里地少，自己村都不够利用，所以不允许别人投标。“基份”坦有些属于“太公仔”（分房以后的小宗。有些分房小宗有祠堂），有些属于私人。为什么属于私人，我们不知道，可能是上辈人卖了。属于私人的坦，是用来出租的。

“公家”的部分才拿出来投标。“公家”是大祠堂、分支的小祠堂）（“小太公”一书室、书房）。性质和向祠堂投田一样。“小太公”的坦有些由于经济困难，把坦卖给私人了。

○河涌与田：【二甲と三甲の河涌（=涌源）の境界について】秋冬季干河涌。堵起来，你干你的，我干我的。河涌不可卖，所以叫“死涌”。田可以卖，所以叫“活田”。

(3) 午後2 金一村委で採訪（聞き取りはすべて黄錦祥氏のみ）

Ego15 黄锦祥：93岁。1917年出生在二甲。7岁在三甲黄氏宗祠读四年旧书。然后在11岁到佛山学打铁。14岁（父亲去世）回乡耕田。自家有田4斗（一亩多）。另外，每年投一些，有些年3—5斗，有些年投不到。家中只有我和母亲耕（我是独子。父亲早丧）。耕了四五年，被国民党拉去当兵（当时大概19岁），当三四年，23岁左右又回乡耕田，结婚，除了耕田外，还打短工。耕到土改。土改成份是贫农。合作化是生产队长。1980年才不干了。30岁左右时母亲去世。

23岁时，耕原有的4斗（1亩多），另外投入三四斗，有时投不到，就耕自己的田和打短工。我去祠堂投“公家”的田（二甲的黄祠）。我只是交过租，没有交过税。

（自有的）4斗田一块在下塑（【下塑归属】三甲。现在名曲争（音，字不知））。投的田每年不一样，是黄姓果敬祖（太公）的田。自有的4斗田，是双造田。地势稍为高些。是我祖先买来的。田主原是三甲的。但我们不可以去三甲捕鱼。如果全塑水浸，分不出河涌，可以捕鱼。如果冬秋季河涌分明，不可以捕鱼。

二甲有多个姓。陆姓有大祠堂，肯定也是来得比较早的。

无界线，但各塑归哪条村是很清楚的。塑归属就形成了“界线”。但实际上无界线。河涌经过那片塑就属那个村。如果河涌下段流经别村的塑，那么下段就属那个村的。

靠近河涌的段叫“涌头”。两边都是田的叫“田基”。如果要经过别人的田才能取水，就要“过水”（经过别人的田，但车完水后，要保持别人田的水深）。如果关系好，可以大家合作把田灌满。如果前面的田无车水，对方又不合作，那么“过水”时就要顺便把别人的田也车上水。

(4) 午後3 陸雪桂氏の案内で実地踏査

3. 1月8日（木）金二村民委員会

金二村民委員会は三甲村と四甲村の2つの自然村から成る。当日は三甲村の古者のみが出席し、四甲村からの出席はなし。一甲村・二甲村と同じく、民国期には、2村とも金溪郷に所属する行政村であり、また、どちらも元代の金東園建設に参加した村といわれている。

(1) 午前 三甲村の黄氏祠堂で採訪

Ego21 黄炽新：81岁。1928年出生在三甲。9岁在金溪社学读3年新书。我、父、母、弟、姐五人共耕20亩（48斗。1亩相当于2.4斗）。其中自有15亩（共4块），租入5亩。

1. 门口田 5斗（约2亩稍多）。
2. 西丫塑 7斗
3. 白水湾（东围内的塑名。10斗）
4. 白水湾 5斗。中间隔开一块是陆世金三甲的田。

以上是自有的。

5. 田份 4 斗
6. 大塑【同、第 23 段】5 斗。接近金江。
7. 沙涌 6 斗。

土改成份是中农。

Ego22 黄元能：1927 年出生在三甲。9 岁在金溪社学开始读书。读了 4 年新学。1940 年在广州打工。1946 年后在金利米店打工。家中原有祖传田 20 斗。父亲赌博，全部陆续卖去。余下 7 斗，由我耕。记不得耕了几年。后来自己又投了“人寿会”田 10 斗。

Ego23 黄枝强：1931 年出生在三甲。无读书。父亲早丧。母亲租入 3 斗田（不足 2 亩），上有二兄，早丧。11 岁去广州打工。1952 年土改回乡。基本上无耕田经历。【土地改革前ににおける経営耕作の経験なし】

Ego24 黄炽森：87 岁。1922 年出生在三甲。6 岁读金溪社学四年。在四甲书塾、高明三洲书塾共读五年书，总共读九年。目前村中文化最高的老人。村中对联均由他（黄炽森）撰写。20 岁开始耕田，父、母、姐和我四人共耕 35 亩（70 多斗）。自有田约 9 亩多（差不多 21 斗）。

1. 下巴塑 4 亩（接近二甲，旁有猪屎塑）
2. 捻颈 5 分（近眠岗，塑心之对面）
3. 大肚涌【同、第 30 段】6 亩（近金江）

土改成份是上中农。

Ego25 黄应远：81 岁。1929 年出生在三甲。7 岁在金溪社学读三年书。在黄氏宗祠和光裘书室读旧书一年。抗战后 16 岁去香港，在洋行打工（懂英文）。土改前（1951 年）回乡。土改成份是地主。祖传和父亲买入共田 50 斗（相当 21 亩）。父亲也在香港洋行经营，母亲在乡买入 3 个南海九江乡的姑娘（当时因抗战遭难到此地），共四人耕作 21 亩（要雇短工）。有一只牛，一只禾艇，水车。全部农具齐备。

Ego26 黄维武：1932 年出生在三甲。8 岁在黄氏宗祠、光裘书室读二年，然后在金溪社学读四年。耕田一年后解放。我和母亲（父亲去新加坡）耕自有的 7 斗田（1948 年买入）。原田主是三甲的阿燕（真名不知）。7 斗一块，在下沙（大肚塑【同、第 30 段】、大塑【同、第 23 段】的附近。全下沙大约共 70 亩）。

○ “鸭埗、鹅埗”：三甲有一个鸭埗（农历五月到七月）、一个鹅埗（农历十月到下一年正月。只在年末经营）。鸭埗在横涌湖（九莲湖。水面面积 29 亩。周围有柄塘塑、沙帽塑、曲争塑。这三个塑都是三甲的塑。柄塘塑接近二甲）。鹅埗在岗头大肚塑【同、第 30 段】（塑中有一个高土。土名“大肚墩”。鹅埗是在上搭棚。

○ 鸭埗经营：先买进鸭苗，在村中养大。农历五月收割后，把鸭赶往鸭埗放养肥大（主要吃收获后余下的谷粒），然后上市。

○ 鹅埗经营：因为鹅埗主要是养育鹅，要集中下鹅蛋，孵化（孵化？）小鹅，卖鹅苗，要地方较大，较固定和集中。二个埗收入都“归三甲村”，不是黄氏独有的。三甲有 6 个姓（按人口多少排序）：黄、邓、周、陆、杜、冯。土改时全村人口大约 600 多人，黄姓大约占 70%。

○“涌源”经营：平时河涌捕鱼无限制。秋冬干水捕鱼要投标。在黄氏宗祠开投。收入“归三甲村”，不是黄氏独有。河涌当地叫“涌源”。河流指“海”，就是西江。

○“十甲坦”：还有“十甲坦”。靠近西江的基脚。“十甲坦”从金洲到东庆，各村有各一段。但“十甲坦”不连贯。有些地方很危险。有基就有坦，这是“基份”。义务是维护基。权利是利用坦，可出租，其收入“归三甲村”。多数用于救基时吃饭，不够吃，鸭埗、鹅埗收入也用于吃饭。涌源收入也用于“公家开支”。所谓“公家开支”是救基开饭，“买兵”国民党拉壮丁时，用钱买人顶替。

黄炽新说：抗战胜利前一直没有交过田税，1946年开始交税。要达到5银元税才起征。黄氏宗祠当时作为国民党的粮仓，我到黄祠交税。全金利各村均来这里交。

黄维武补充：主要是东围金清（金溪、清平）乡来这里交。

○围料：知道有“围料”，但从来没有交过。是“公家”给了（鸭埗、鹅埗、涌源、坦）。如果不够，还要从“太公田”的收入中补充）。

○1949年西围、南围崩基。东围也要“复堤”。有美国留学生来测量。联合国送米来救济，所以当年修堤的人发米作工钱。过去修堤是不发米的，但供应午、晚饭。

(2) 午後1 恒大酒店で採訪

留下的老农民是黄炽新、黄炽森、黄维武三位。

黄炽新：我家田亩少，还不到上税的程度（黄炽森插话：要达到五银元才起征）。

黄维武：我姑姑家（姑姑在三甲嫁冯家）在1946年也交过田税，她家田也较多。当时来通知交税的人是保长。

黄炽森、黄维武：有一条涌源（猪屎塱涌）同二甲相交。

以下、しばらく日本語で記す。

○三甲の涌源と二甲の涌源の境界：金江村付近に所在する。その涌源は猪屎塱涌で、二甲の涌源と三甲の涌源に分かれ、その境界に「基埗」がある。固定標識とするために、境界線の河床を他の河床よりも人为的に高くしている。これが基埗である（図5）。猪屎塱涌は、猪屎塱（朱子塱）【同、第39段】と大塱【同、第23段】に接している。猪屎塱は二甲に帰属する塱である。猪屎塱の田の大部分（「90%以上」）は二甲の村民が所有しているが、金江村の村民もわずかに（「很小一部分」）所有している。大塱は、基埗の境界の延長線上で二甲に帰属する部分と三甲に帰属する部分とに分かれ。大塱のうち、三甲に帰属する部分の田のほとんどは、三甲の村民が所有していた。同じく、大塱のうち、二甲に帰属する部分の田のほとんどは、二甲の村民が所有していた。ただし基埗の境界の延長線上付近では、「插花」があった【これは田の所有レベルにおける「插花」である】。

○三甲与二甲的争端的原因：每年农历八月涌源开投。二甲、三甲各自进行。因基埗固定，涌源也固定（插话：这是祖宗时就确定的）。所以从来没有发生过争端。有争端的部分是二甲、三甲之间的田基【各筆耕地間のあぜ】。各自都想向对方挖进一点，田基难固定，所以有时发生争端。但没有发生过械斗。

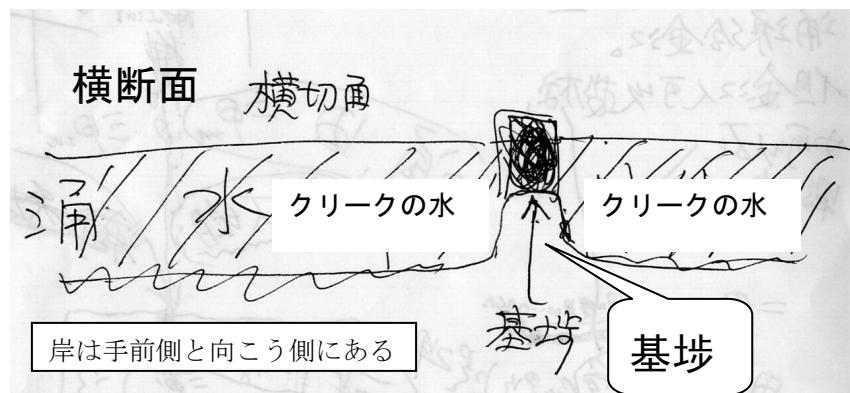


図5 「基埗」(陳忠烈氏作図)

○基埗：每年秋冬筑起基埗，车干水捕鱼。如果二甲车水，三甲就筑起基埗；如果三甲车水，二甲就筑基埗。但每年必须在同一位置筑基埗，不许一移前或移后。

○金江村：旧时金江完全没有涌源，因此也没有鸭埗。但金江人可以投标，也可以在鸭埗打工。大跃进时拨了一些涌源给金江。

○卖田：先问亲人，亲人不买的话，才能卖给其他人。

黄维武：1952年土改时我是农协委员。金江、一、二、三、四、五、六甲合为农协，叫“金利乡农协委员会”。四甲人多田少，金江田多。金江拨60亩给四甲，不再拨涌源给金江。金江人多是因为来看鸭、看山坟的，后来落户，投了很多二、三甲的田来耕，土改时规定“原耕基础不变”，所以他们田多。土改后，涌源附近的田都成了金江的田，大跃进时，把部分涌源拨给金江。拨给四甲的60亩田在大肚塱。

土改时，五甲人最多，但平均人口原耕基础的田也基本合土改人均标准，只从三甲拨了十多亩给它。以下人口多次序是：二、一、四、三、六、金江（金江人最少）。

东庆、振星、墨岗、望心、竹洲、茅洲、渤海、盘古，土改是东围乡农协。

○西围：一、二、三、四甲在西围的田按“原耕基础”不变。**四甲在西围有涌源（土名上下塘涌），一、二、三甲无涌源。【四甲は西围に涌源（と望）を持っていたが、一・二・三甲は西围には涌源（と望）をもたず、寄庄していたと推測される。】**

○寄庄谷：

曲争望：涌源是三甲的。田是二、三甲插花的。

白水湾：涌源是三甲的。田是二、三、五甲插花的。

“望”与“田”不同，曲争“望”是三甲的，但“田”有些是二甲的。为什么这样说？曲争望的田在从前全部是三甲的，祖宗时给二甲卖了一些，所以有“田”是二甲的，但二甲的“田”是“寄庄”，要由三甲的人看管，二甲的田主要给三甲管田人交钱，这管田人是投标的。“寄庄谷”是给管田人的田谷。我们也有田在二甲寄庄。一斗田的寄庄谷3-4斤，过去一斗田收成比较好是100斤（挣稿）。挣稿收获2次，寄庄谷也收2次。每次3-4斤。三甲人不用交，可能是太公给了【？】（黄维武插话：抗战后没有听说收寄庄谷了）

黄炽森：1943年我投过寄庄谷。在黄祠（今天上午开会之处）开投。开投钱“归全村（三甲）”，

但收寄庄户的那部分谷归投标人所有。三甲投得人一般是三个人，一只禾艇巡游。我赚的谷不记得了。但投一次可拿到至少 100 斤谷（相当于一年一亩的产量）。我认为还是合算的。全三甲的田都要巡看，但收寄庄谷只收别甲人的田。我去过二甲的寄庄人家收过寄庄谷，四甲也有少量寄庄谷。当时也有四甲的管田人来三甲收寄庄谷。**二、三、四甲的田插花，只有这几个甲的田互有寄庄，五甲没有。**管田人也收割后，到寄庄的田人的晒场，一脱粒，马上收走。

陈忠烈问：太公的收入有鸭埗、鹅埗、涌源、寄庄谷？

黄维武插话：不能说“太公的”，要说“三甲村的”。

○鹅埗收入最多，一年可投标收入一万斤谷以上，鸭埗二千到三千斤谷。

三黄（黄炽新、黄炽森、黄维武）确认：这些收入不能说“太公的”，是“三甲村的、六姓的”。涌源收入很难统计，每年农历九月初一开始禁止捕鱼，开始准备筑基埗，冬至后十天筑基埗捕鱼。但是，因为在这些期限之前，大家都抢先捕鱼，等到筑基埗时，涌源剩下的鱼已不多了，收入少，投标的收入也相对较少。

(3) 午後 2 黄維武氏の案内で実地踏査

4. 1月9日（金）金利鎮金江村民委員会と東圍（墨江）村民委員会

(1) 午前 金江村民委員会

Ego06 谢少初：1937 年生在本村东边。9 岁开始读书，在谢氏祠读旧书。因为记忆力不好，在解放后还读书，总共读了十年。17 岁开始耕田（那时是互助组）。合作化时做东边的生产队长，到 80 年代初退位。

解放前，自己田很少，租一甲田近 30 斗（=10 多亩），在深涌尻壠，是整段田。深涌尻壠是一甲的。我们【=金江村】田少，只有租耕。涌源是深涌河。

土改时的成份是贫农。祖父遗下的田在牛角段壠、猪仔壠（总共不足 2 亩）。我听说这些原不是我们的。祖父怎样得来，我不知道。

牛角段【同、第 22 段】、猪仔壠【同、第 1 段】是本村的。猪仔壠没有涌源【涌源そのものがないのか。涌源が他の村に帰属しているのか未確認】牛角段的涌源归本村。这道涌源很长，经过几个壠。有筑基捕鱼的情况，我不知道。

土改的田分布：关刀湖下壠【同、第 47 段】、蚊头围基脚【同、第 44 段】、锦罗岗（在蚊头围基脚秧地的西）。面积不记得。

我耕过的田之中，牛角段壠离家最近。以前要用禾艇才能去。现在走路 10 分钟。猪仔壠也很近。路程过去也要用禾艇，现在走路不用 10 分钟。最远是蚊头围。除了用禾艇之外，还要走路。现在走路要 20-25 分钟。蚊头围的田同一甲交界。

(2) 午後 東围（墨江）村民委員会

ここまで村民委員会は金東围の北半に位置しているが、南半の状況と比較するために

墨江村民委员会を訪問した。解放前については未詳だが、集団化以降に農地改造があり、景觀がかなり変化したようだ。

Ego31 黄志豪：81歳。1928年生在新加坡。4歳同母亲回乡。属于本村中社。父亲在新加坡生意。9岁在平清祖祠和师塾家中读1年半旧书。11岁去广州学徒（做钮扣）。15岁后回金利。10岁开始有耕田经历，同母亲耕3斗田（自有2斗，租入1斗）。分2块：自有的2斗田在于白伍塑和企岭。15岁回乡后，一方面在金利镇做小买卖，一方面帮母亲耕田。1950年参加拍金安围。1952年土改时的成份是贫农。

Ego32 黄成武：81歳。1928年生在本村。属于本村西社。10岁在平清祖祠和师塾家中读4年旧书。14岁开始在乡耕田，没有外出过。自有田12斗，投“太祖田”（5—7斗，一年一投。每年不一样）。土改时的成份是下中农。自有田至少分开8处：

1. 桥头（9升）
2. 岭头（2.5斗）第一和第二这两块是用插秧的双造田。下造要在农历八月开放新窦进西江水才能种。如果西江水大，不开窦就不能种双造。品种是白粘，稻秆1米高左右。
3. 邓坑（2.5斗）
4. 大湖（9升）
5. 水路（2.5斗）
6. 灯盏湖（1.2斗）
7. 田心湖（2.?斗）挣稿双造。产量比第1、2块田低。
8. 辣塌（1.?斗）

其它各块地势很低，只能种一造，产量很低，一斗田年产一箩（50斤）。

这里要每年担基，入秋以后就进行。过去的田地有高、低、大、小，分好几个梯级。目前看见的情况是公社以后平整的，近十年来实现平土机耕。

「2. 岭头」在西社塑。东围【=墨江村的塑】统称东围塑。西社塑是其中一个土名。【この後はやや不明】

○墨江【=墨江村的村庄】分西社、中社、平社。西社有一个社坛（叫翰墨社），中社、平社合一个社坛（叫两兄社，在龙关牌坊边）。

○西社塑的耕地面积大约600斗田。

○听说过上六甲、下四甲同东围的围基有关系。墨江入七甲。第八甲是眠岗、盘古、茅洲、竹洲。第九甲是淳宣（林家、黄家、区家、刘家）。第十甲是东庆、藤岗、外沙。谷基属七甲。（白）藤岗旧时不入甲。其始祖同人看鸭看山坟而落籍，很多甲都欺负他，所以救基时他们要同七甲一起，因为七甲离他们远，以前不大欺负他们，感情上还没有大的冲突。救基时，听见报警的鼓声，他们就自动来七甲的堤围上。

○七甲负责的基：从白午岗到谷基村。白午岗的上段是六甲的，更上的段就不知道了。谷基的下段是眠岗等八甲的。八甲负责的段是从谷基村到咸闸（金洲口）。第九甲不知。听说白藤岗不入十甲，但有“麒麟甲”之称。

○解放前各社有鸭埗。每年在各社祠堂开投（全村姓黄，只有几个姓李。娣仔=家仆）。各社

有涌源，也是在各祠开投。

○同其它乡的接界。一、二、三甲。在塑边上有相接。墨江没有租别村的田。中社收要古（要东村、要西村）的寄庄谷。西社收谷基村的寄庄谷，但很少量。寄庄的田成熟时，收谷人去田中割一些谷（连稻秆一起）运回自家的晒地脱粒。每块田交的稻子没有严格规定，只是收谷人随意割，一般来说寄庄人都不愿意让收谷人多割。

○村の收入源（寄庄谷、鸭埗、涌源）：鸭埗收入多。涌源在各社祠堂开投。收入比鸭埗少。

黃成武：别村的田在我墨江的塑埗，就要交寄庄谷。如果别村人租我村塑埗的田耕种，不用交寄庄谷。看管寄庄田的人是本村老更，在各祠投标。解放后宗族（被）打倒了，才没有了寄庄谷。

○交界：盘古、眠岗、塑心、要古、谷基。塑心是很久以前居住在墨江的江嘴（墨江的东边）的谭姓人迁去的。



金利鎮 鄧宏安副書記



高要市外事僑務局 謝応仲副局長



左：金利鎮 黃麗英委員
右：高要市外事僑務局員



左1：片山 左3：陳忠烈氏 右3荒武達朗氏



01 謝寶源氏



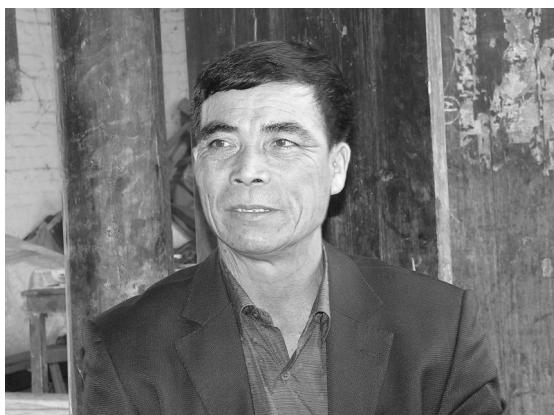
02 鄧五九氏



03 謝濟氏



04 鄧秩祥氏



金江村委 謝國洪書記



金一村委 黃焯均副主任



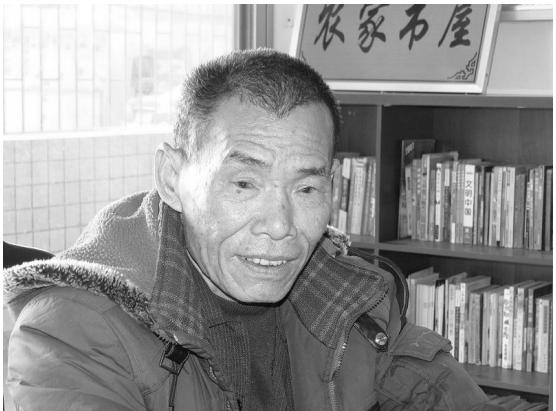
11 黃 銳氏



12 趙盛基氏



13 黃照南氏



14 陸雪桂氏



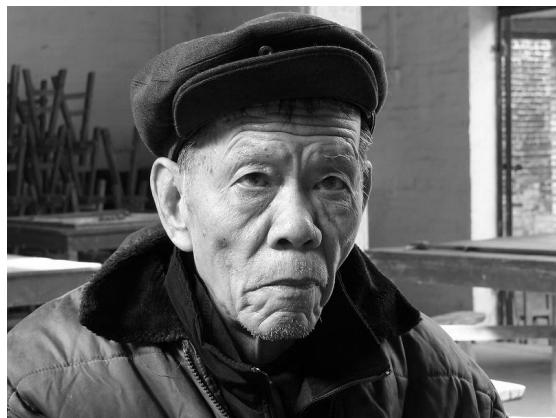
15 黃錦祥氏



左は陸雪桂氏 右は陳忠烈氏



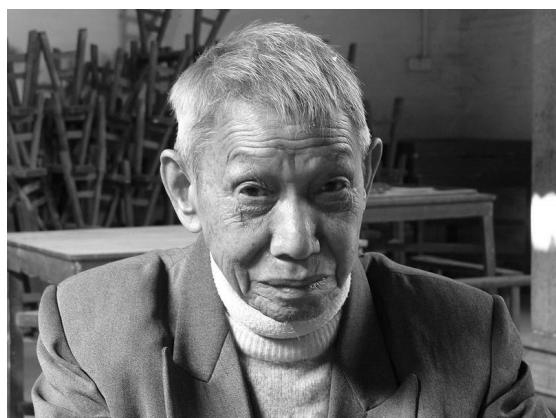
21 黃熾新氏



22 黃元能氏



23 黃枝強氏



24 黃熾森氏



25 黃忼遠氏



26 黃維武氏



金二村委の幹部（文書担当）



06 謝少初氏



金江村第一段の猪仔壟（現在は魚塘）



31 黃志豪氏



32 黃成武氏



墨江村委 黃書記